

# 泥と星

～Mire and Star～

作・演出 萬野 展

## 登場人物

真野麻紀 二十七歳。

齋木純 真野の友人。二十八歳。

庚子塚弘嗣 助教授。二十九歳。

千堂憲子 二十五歳。

作本加代 科学者。三十六歳。

夏見碧子 三十歳。

夏見紺子 学生。碧子の妹。二十三歳。

瀬瀬 刑事。二十六歳。

真田満智子 警部補。三十歳。

川治昇平 真野・齋木の後輩。二十六歳。

船曳尚子 工事現場の少女。十六歳。

高梨章 学生。二十二歳。

相木仁美 二十四歳。

鈴木晴久 刑事。二十七歳。

土師俊一 警視庁警備局局員。二十七歳。

\*\*\*

青い服の男女

現場監督

若い作業員

【注記】当脚本の著作権は萬野展が保持する。当脚本の無断上演を禁ずる。

## 一幕・一場

東京郊外。深夜。港近くの倉庫街。

人気のない倉庫に立つ真田満智子警部補。  
足下にはシートで覆われた、死体とおぼしき物体。  
やや後方にコートを着た若い男、土師俊一が立っている。

真田の部下の刑事、額瀬滋・鈴木晴久、登場。

真田警部補に耳打ちをする。

真田、小声で何か指示する。

額瀬がそれを受けて、何かを取りに退場する。

鈴木  
…。

鈴木、後方のコートをちらりと見る。

コート男は爽やかに笑みを返す。

鈴木 …。…いいんですかね、鑑識呼ばなくて。

真田 いいってんだからいいんだろうよ。

鈴木 写真撮んなくても…

真田 いいんでしょうよ。

鈴木 …。

真田 …。

鈴木 (後方コート男を気にしつつさらに小声で)…なんか…キナ臭い感じします…  
よね…。

真田 …。

真田、苦虫を噛みつぶしたような顔で黙っている。

額瀬、担架を抱えて再登場。

真田が目で指示し、額瀬と鈴木が死体を担架に乗せる。

シートが捲れ、死体が目にも鮮やかな青い服を着ているのがわかる。  
額瀬、死体と目が合って吐きそうになったりしながらも、なんとか作業を終える。

真田がコート男を振り返ると、土師はニコヤカに「どうぞ」という手つきをする。

真田が顎をしゃくる。

鈴木が担架の端に取りつく。

額瀬 …。(眺めている)

真田 …。(なにやってんの、という視線)

額瀬 …。(え、あたしが? という視線)

真田 …。(決まってるんだろ、という険しい視線)

纏纏（非力）、よろよろしながら鈴木とふたりで死体を運び出し、退場。

死体のなくなった倉庫には、再び真田と土師のみが立ちつくしている。

遠くで霧笛が聞こえる。

真田 …。

土師 冷えますねえ。

真田 …。

土師 もうすぐ夜が明けちゃうな。今日、日曜日ですよ。

真田 …。

土師 僕なんか、土日はぎっちり休むことにしてるんですよ。刑事さんなんかアレでしょ、やっぱ週末なんか家にいたいですよ。ご家庭もおありなことだし。

真田 私はここ三ヶ月休みなします。

土師 うわあ。やっぱ凄いですね。局でもね、真田さん有名なんですよ。三十になったばかりで警部補でしょ。しかも女で。違いますねえ、やっぱ。凄いなあ、やっぱ。

真田 女だからですよ。

土師 はあ。

真田 女も少し偉くしとかなないと、世間の風当たりが強いですよ、最近じゃ。

土師 そんなもんですかね。…だけど真田さん、結婚されてるんでしょう？ 確かお子さんも女の子がひとり。やっぱご家庭第一じゃないですか。

真田 そんなことはどうでもいいんです。

土師 はあ。でもやっぱご家庭…

真田 ご家庭ご家庭つてうるさいなアンタは！ テレフォンショッピングかお前は！

土師 あれれ。

真田 いい加減にバカの振りはやめて、言いたいことがあるなら言ったらどうよ。

土師 あはあ。いやあ、僕は別にですね…

真田 あなた、いつから警備局にいるって？

土師 ええ、まあ、つい最近ですが…

真田 そうでしょうよ。その年で局でたたき上げなんてあり得ない。どうせどっか上のほうから降りてきたんでしょが。さっさと正体見せたらどう。

土師 あれえ、私、いくつに見えますかね？

真田 あれは誰。

土師 …。

真田 なんでもみ消す？ ホシは？ 誰がやったか分かってるんでしょうが。ええ？

土師 あー、まあ、そうですね、そう言ったことはまあ、どちらかというと、どうでもいいこととして…

真田 どうでもいい…？ 一人死んでどうでもいいってどういうことよ！

土師 あ、申し上げたいことはですね、この件に関しては一切ノータッチにしていただくということとして。それはもうそちらの上司の方にも話は通っているわけとして、ええ。

真田 …。

土師 それでまあ、もうひとつは、これと似たようなケースがもし起こった場合、速やかにこちらに報しせていただきたいと思います、そういう…

真田 ……それどういふこと。

土師 え、いや、ですから…

真田 また起きるってことね、こういう事件が。

土師 いやあ、その…

真田 分かっているんなら教えなさい。いつ！ どこで！

土師 いや、警部さん警部さん。

真田 私は警部補よ！ 起こることが分かっているなら、なんでほっとくんだ。それでも警察官か！ あんただって警察の一員だろうが！

土師 真田さん、これは事件じゃないんです。

真田 死んでるだろ！ 明らかに殺しだろ！

土師 事件は警察が事件と認めて初めて事件になるわけでした。ですからこれは事件じゃないんです。これを事件にしまうと、警部さん。

真田 ……

土師 あなた、警察を敵に回すことになりますよ。

真田 ……

土師 あ、警部補さん、でしたね、失礼。

真田 ……

土師 娘さん、まだ小さいんでしょう？

真田 ……あんた、何者？

土師、それには答えず、ポケットから封筒を出す。

土師 お手数ですけど、そちらの上司の方に渡していただけますか。さきほどの男の住所氏名ですが。

真田 ……

土師 いちおう公安ウツナでも、あれこれメンテナンスはしてるんですけど、まあ人間のやることですから…。万が一どつかから搜索願なんか出ちゃって、記録に残っちゃったりすると美しくありませんからねえ。

真田、封筒を受け取った封筒をじつと見ている。

土師 余計なことですが警部さん、それ、開けないほうがいいですよ。…ご家庭は大切になさらないと。

土師、軽く頭を下げて退場していく。

真田 似たようなケースって…

土師 (足を止め) はい？

真田 ……これと似たようなケースってのは、どういう意味です。どういう場合に連絡すればいいんです。

土師 ……ああ、それは一言おっしゃって下さればわかります。…「青い服を着た人物が死んでいる」とね。それじゃ。

土師、退場。  
入れ替わりに、纈纈、鈴木登場。

纈纈 真田さん。

真田 ……

纈纈 死体運びましたけど…。

真田 ……ああ。

鈴木 さっきのあれ、公安ですか。

纈纈 ひよつとして、これって、もみ消しですか？

真田 ひよつとしてもぎよつとしてもあるか。…くそつ、舐めやがって…。

纈纈 じゃ、なに、あの死体って（思い出して吐き気）…

鈴木 （背中をさすりつつ）スパイかなんかですかね。

真田 知らん。知りたくもない。

鈴木 で、どうするんです。

真田 なにが。

鈴木 いや、これから。

真田 だから知らんて言ってるでしょ。事件じゃないんだから。事件なんかなんにも起こってないし、誰も死んでないの。明日の朝イチでこの封筒を署長に渡してそれでこっちはお役ご免てわけ。

纈纈 署長いないじゃないですか。

真田 え？

纈纈 署長って、来週まで出張ですよ。

真田 そうか…、そうだったな…。

真田、考え込んでる。

纈纈 それにしてもこんなの初めてですね。あからさまっていうか…

鈴木 さっきのヤツ、公安にしちや若いよな。俺たちと同じくらいじゃないか。

纈纈 そうよね。

真田 どっか上のほうから来たのよ。においが違う。警察の人間じゃない。便宜上警備局付けになってるだけ。

纈纈 上のほうって？

真田 上のほうは上のほうよ。あたしらの手の届かない雲の上。

鈴木 しかしですね、訳も分ないままもみ消しの片棒担がされてるわけですよね、これって。そんなのおかしいじゃないですか。

真田 腹が立つか。

鈴木 立ちますよ。

真田 子供の使いみたいな仕事に狩り出されて頭に来るか。

鈴木 冗談じゃないですよ。

真田 ほしいままに権力をふるう遣り口をみて正義の血がたぎるか。

鈴木 法治国家の名折れですよ。

真田 （封筒を差し出す）よし、じゃ、封を切れ。

鈴木 え。いや警部補どうぞ。

真田 あたしやダンナと娘がいる。おまえやれ。

鈴木 いやそんな。僕だって家にはハムスターとマミズクラゲが…

真田 おまえのことは、国家権力に果敢に挑んだ若き戦士として未永く記憶にとどめ、  
 残業代も割り増し申請してやる。さあやれ。

鈴木 要りませんよ。勘弁してください。パス。パスします。

真田 全責任は、こいつがとる。  
 纈 纈 (いきなり振られて) えっ。いや。ダメです。パス2。真田さんだって知りた  
 くないって言うってたじゃないですか。

真田 (ひっばたいて、封筒を引たくる) おまえらそれでもプロか。まったく情け  
 ないよあたしや。…署長の出張はいつまでだ？

纈 来週の月曜には帰ってきますけど。

真田 …。

警部、じっと封筒を見ているが、意を決して封をちぎりとる。

鈴木 うわ。

真田 うわじゃない。ビクビクすんな。

纈 署長にバレますよ。

真田 そこの似たような封筒に入れなおしときゃいいんだよ、オタオタすんな。(中  
 の書類を取り出し目を走らせる) 住所と名前だけだ。よく見て頭にたたき込む。  
 コピーはとれない。

真田、紙を鈴木の目の前にかざす。

鈴木 …。(逃げ腰になりながらも必死で暗記する)

真田、紙を纈へ。

纈 …。(両目をしっかり閉じている。ついでに耳まで塞いでいる)

真田 …:なにやってんだ。(はたいて紙を纈に押し付ける)…:住所を覚えろ。今から  
 動くよ。

纈 え。動くって…。

真田 この件に関して分かったことは、いつさい記録に残すな。とにかくもう少し情  
 報を揃えるんだ。

纈 捜査するんですか！ 事件でもないのに。

真田 お前らがさっき運んだのはなんだ。だれがどう見たって殺人事件なんだよ！

鈴木 しかし公式には…

真田 そんなことは分かっている！ いい、こいつは商売抜きよ。畑違いの役人風情  
 にデカいツラされて黙って引ッ込んでいられる？…え、どうなの！

鈴木 現場の意地…:ですね。

纈 しかし、ヘタに動いたら…

真田 かけ出しのヒヨッコじゃないんだ。うまく動けばいいだろ。署長が戻るまで五  
 日間、やれるだけやるのよ。とにかくこの男が死んでるってことが知られない  
 ように。それからこつちの身分もね。…分かったらかかれ。

鈴木・纈 はい。

真田 慎重に！ いいね、これよ（口にチャック）。さもなきやコレ（クビ切り）だよ。

鈴木・纈纈、退場。  
真田、別方向に退場。

## 一幕・一場

東京。午前三時。人気のない旧目白通り。

真野麻紀、齋木純、登場。  
結婚式帰りのような格好で、それぞれに酔っている。

純 ちよつと待つてよ。待つてつてば！ 真野！

麻紀 ……なによ、声でかいわね、あんたは。

純 あんたスタスタ歩きすぎよ、ちよつと。

純、麻紀に追いつく。かなりへぼっている。

麻紀 普通に歩いてんじやないよ。あんたが飲み過ぎてへぼってるだけでしょ。

純 ああ気持ち悪い。吐きそう。吐いていい？

麻紀 やめてよ、こんなところで。

純 どんなどこならいいのよう。

麻紀 あたしのいないとこ。

純 冷たいわあんたつて。純は悲しいわ。悲しさのあまり妊娠してしまえそう。生まれてくる子供は悲しみの申し子。ジュネ。いいえ、むしろキュンティアー。

麻紀 なにを言い出すんだ、あんたは。

純 ああラーメン喰いたい。

麻紀 気持ち悪いんじやなかったのか。

純 麻紀ちゃんタバコ持ってない？

麻紀 ない。全部吸っちゃった。

純 うそ、今何時？

麻紀 自販機死んでる時間。…ていうか、自販機がもうすぐ生き返る時間。

純 うそ、あたし明日仕事じゃん。

麻紀 ご愁傷様。…タクシー拾おうよ。

純、麻紀、道路際で立つてタクシーを止めようとするが、車そのものがまばらである。

麻紀 ……車そのものが通らないな。

純 ……どこの田舎だ、ここは。

タクシーのヘッドライトが近づく。

麻紀 ……あ。

純 ……お。

麻紀と純、手を上げる。

通過。

タクシーのテールランプが遠のく。

純 ……

麻紀 ……



純 舐めんなよ！

麻紀 バッキヤロー！

純 コンチクショー！

わめき散らすふたり。  
息が切れて静かになる。  
再びタクシーを待つ。

麻紀 ……しっかしさ、まさかあの川昇かわしやうが結婚するとはね…。

純 む。

麻紀 世界の終わりが三回続けて来ても、あいつだけは女は出来ん！ と思っただけどな、あたしは。

純 (頷きつつ) しかもけっこう美人。

麻紀 美人？ だれが？

純 川昇のカミさん。

麻紀 あれが？ 美人？ あんたついに脳から目に来たね。

純 失敬な。あんたより見る目があるの、あたしは。

麻紀 美人ー？ あれがあ？ だってアンタ、蟹江圭三みたいな顔しとったじゃないの。

純 (頷きつつ) 渋い。

麻紀 しかも六回も着替えかか羽根替えはねか…

純 凝ってたねえ、今日のは。

麻紀 なんだって、牛車ぎっしゃだよ、牛車に乗って出てきちゃうんだよ。

純 ああ。

麻紀 たまげたよ、あたしや。平安朝だよ。十二単ひとえだよ。

純 凄かったなり。

麻紀 おまえが降りてその車を牽ひけ！ って感じ。

純 確かに。

麻紀 挙げ句の果てに最後の、あれ…

純 ああ(思い出し笑い)…飛行船。

麻紀 飛行船…(思い出して笑い出す)

純 (笑いつつ) あれは…あれはどうでしょうか…

麻紀 (笑いつつ) インディジョーンズじゃないんだから。

純 (笑いつつ) あれ乗ってた川昇さ、へんなヒラヒラの…タクシードみたいの…

麻紀 あ…言わないで…

純 ……なんか、スペイン宗教裁判みたいな…

麻紀 (爆笑)

純 おまえ誰だよって…

ふたり、大笑いしている。

純 あ、くるま…(笑いがおさまらない)。

麻紀 あ。(同じく)

タクシーのヘッドライトが近づく。  
麻紀と純、笑いながら手を上げる。  
通過。  
タクシーのテールランプが遠のく。

純 ……

麻紀 ……

舐めんなよ！（笑っている）

麻紀 バッキヤロー！（笑っている）

純 ああ、なんだか怒っているんだかなんだかわからない…！

麻紀 もういい！ あたしや歩く！

純 ちよつと待ちなさいよ。何キロあると思ってるの。

麻紀 だいたいあんた逆方向じゃないのよ。大泉でしょ。

純 ああ、いいのいいの。あたし今日は要<sup>かなめちよう</sup>町行くから。

麻紀 要町？

純 そ。男んところ。

麻紀 ……

純 なに？

麻紀 ……なんでもない。  
なによ。

ふたり、やや黙っている。

麻紀 ……あ、タバコあった。

麻紀、ポケットからクシャクシャになったタバコのパッケージを出す。

麻紀 一本残ってる…。

麻紀、パッケージからヨレヨレの一本を引っぱり出す。

純の顔を見る。

純も麻紀の顔を見る。

麻紀 喫<sup>す</sup>う？

純 （首を横に振る）あんた喫<sup>す</sup>いなよ。

麻紀、ライターを探るが、出てこない。

純、ポケットからライターを出して、火をつけてやる。

麻紀 ……

ガードレールにもたれてタバコを喫<sup>す</sup>う麻紀。

隣でそれを見ている純。

麻紀、二、三口喫<sup>す</sup>って、純にタバコを寄越す。

純が黙って受け取り、一口喫<sup>す</sup>う。

純 相変わらず連絡してないの？

麻紀 なに…？

純 庚子塚<sup>こうしづか</sup>さん。

麻紀 してない。

純  
ふうん。

純、タバコを返す。  
麻紀、受け取って一口喫う。

純  
大変そう？

麻紀  
なにが。  
純  
庚子塚さん。

麻紀  
そりゃあ…大変なんでしょうよ。

純  
大学は？

麻紀  
鹹首くびにはなつてないみたい。行ってもいないみたいけど。

純  
クビじゃないんだ。だって刑事被告人でしょ。

麻紀  
無罪なのは分かっているから。でも世間体があるからね。辞表出すの待っているんじゃないかな。

純  
温情ね。

麻紀  
そうね…。

純  
首切られても、あの人ならケロッとしてるんじゃないの。  
麻紀  
…うん。

麻紀、短くなったタバコを純に差し出す。

純、受け取らずに口を寄せて、麻紀にタバコを持たせたまま、吸い口から最後の一口を喫う。

純が最後の煙を空に向かって吐く。  
ふたりの目が合う。

麻紀、吸い殻を道路に向かって放り投げようと腕を振り上げる。

純  
あ、車！

麻紀、吸い殻を投げ捨てるのをやめて、そちらを見る。

ヘッドライトが近づく。

純だけが手を上げると、タクシーは通り過ぎたところで止まったようだ。

純  
…やり！ 行こ！

麻紀  
あたし、いいよ。

純  
なに言ってるの。

麻紀  
うん、あたし、少しフラフラしてから帰るからさ。

純  
…。

純、探るように麻紀の顔を覗く。

麻紀  
だいじょうぶよ。あんた、早く男んところ行きなよ。

純  
…。

麻紀  
これ、持ってたって、重いから。(引き出物の袋を渡す)…ほら、タクシー行っちゃうよ。

純、大きな引き出物の袋をふたつ持って、振り返りつつ退場していく。

純  
電話する！

麻紀 うん。

純 乗りまーす！…乗るって言うってんだろ！

純、退場。

麻紀、ひとり残って空を見上げている。

## 一幕・三場

麻紀、ひとり残って空を見上げている。

そこへ、女がひとり早足で登場。  
女（千堂憲子）はまっすぐ麻紀のほうへ歩いてくる。  
麻紀はかろうじてそれをよける。

麻紀 ……

千堂 （すれ違いざまに）ここにいないほうがいいわよ。

麻紀 え？

麻紀が振り返ると女は既に遠ざかっている。  
女がピタリと足を止める。

千堂 ……

女、小さく舌打ちして、まっすぐに麻紀のほうへ戻ってくる。

千堂 話を合わせて。いい？

麻紀 なんのことよ。

千堂 シッ。名前は？

麻紀 ……

千堂 イザナキを訪ねてくるのは今ではツクヨミだけよ。いいわね。

麻紀 はあ？

千堂 いいから憶えて。イザナキを訪ねてくるのは…、

麻紀 あ、あのねえ…

千堂 ツクヨミよ。ツ・ク・ヨ・ミ。四文字。憶えて。人並み程度の脳味噌はあるんでしょ。

麻紀 ……（口を開いてなにか言いかける）

千堂 シッ。来たわ。

最初に女が来た方から女ひとり。

その反対側から女（夏見碧子）と男ひとりずつ。

静かな足取りで登場し、千堂と麻紀を挟むように立ち止まる。

三人はいずれも服装のどこかに、夜目にも鮮やかな青い色のものを着けている。

夏見 ……こんばんは、千堂さん。お久しぶり。

千堂 ホントに久しぶりね、夏見さん。二百年振りくらいかしら。最初に会ったとき肩車してもらったこと、今でも忘れないわ。

夏見 （口元で笑う）少し年齢の計算が合わないみたいね、お互いに。人違いしたかしら？

千堂 そんなことないでしょ。あなたみたいに印象に残る人を間違えるはずないもの。  
夏見 それはどうも。

千堂 そう言えば最近、あたしのアパートのまわりをこそ泥みたいにウロついている目つきが悪い年増女があなたにちよつと似てたような気がするけど、それこそ人違いよね。

夏見 強気ね、千堂さん。今までネズミみたいに逃げ回っていたかと思えば。あなたはいつも私たちの予想を裏切って楽しませてくれる…。もう逃げられないと聞き直ったのかしら？ それともそちらの方のせいかしら。

千堂 あらごめんなさい。紹介しますね。こちら私の仕事を手伝ってくださることになっている、古代中華料理研究家の播粉木塚トモエさん。

麻紀 ス、スリコギ？

千堂 ご存じでしょ、変わったお名前だし。播粉木塚さんはあの古代中華料理の権威、佐竹政則博士まさのりの最後の内弟子と言われた方です。ですよね？

麻紀 えっ、ええ、まあ。

夏見 (かなり疑わしそうに) これは存じませんで失礼いたしました。お初にお目にかかります、夏見と申します。

麻紀 …。

千堂 …。(ニコヤカに麻紀を見る。肩に添えた手に力がこもる)

麻紀 …スリコギ、ツカです。

夏見 佐竹先生のお弟子さん…。そうですね。私たちも佐竹先生にはひとかたならずお世話になりました。先生はお元気ですか？

麻紀 え、ええ…まあ…

夏見 いずれこちらからご挨拶にと思つています。もちろん先生のお加減さえよろしければ、ですけど。

麻紀 ああ、ええ…

千堂 それはどうでしょう。佐竹先生は健康上の理由で引退されたご境遇。あまり大勢で押し掛けてはかえつてご迷惑。ですよね？

麻紀 うえ…ええ、まあ、そういうこともあるかな…

千堂 播粉木塚さんは特別なお弟子さんですからいいとして、今の先生にお会いできるのはとても限られた方たちばかりと聞いてます。でしたよね？

麻紀 …(ただ頷く)

夏見 そうですか、それは残念ですわ。実は私たち、佐竹先生にお会いしてお話しなければならぬことがあるのです。どうでしょう、播粉木塚さん、もしあなたが本当に先生のお弟子さんなら、私どものために仲介の労をとってはいただけませんかしら？

麻紀 …。

夏見 それとも私では先生にお目通りする資格がないかしら？

麻紀の腕をつかむ千堂の手に力が入る。

麻紀 い…(千堂は知らん顔をしている)いいえ、そういうわけでは…ただ、その…

夏見 イ…イザナキをたずねてくるのは、いまではツクヨミだけなので…

夏見の表情が目に見えて硬化する。

千堂は我が意を得たりとばかりにニココリ笑う。

千堂 なるほどねえ…。

麻紀 …なにがなるほどなんだ…。

夏見 千堂さん、とてもいいお友達をお持ちだわ。…幸運でしたね。

千堂 ええ、おかげさまで。

夏見、ツカツカと近寄って、麻紀に名刺を渡す。

麻紀 あ、あの…

夏見 もし先生のお気が変わられましたら、ぜひご連絡を。そのときはすぐ参上します。…スサノオを連れてね。

夏見が合図すると、他のふたりは無言・無表情で退場していく。

夏見 では播粉木塚さん、いずれ改めて。千堂さんも。

千堂 さようなら、夏見さん。

夏見、踵を返し早足で退場していく。

麻紀、名刺を手に呆然としている。

千堂、小さく息を吐いて肩の力を抜き、そのまま去ろうとする。

麻紀 …ちよつ、ちよつと待ちなさいよ！

千堂 ん？

麻紀 説明は！

千堂 なにが？

麻紀 どういうことなのか説明くらいしなさいよ！

千堂 …なんで？

麻紀 なんてって…あんた、人を勝手に、その、なんか、なんだか知らないけど巻き込んでいて、なんの挨拶もないわけ？ 冗談じゃないわよ！

千堂 声が大きいわよ播粉木塚さん。

麻紀 誰がスリコギよ！

千堂 だってあなた名前言わないから。

麻紀 あのね、ちよつと、いい加減にしなさいよ…。

千堂 わかった。わかったわよ。短気ね。とにかくホラ、もう夜が明けるから、そのへんでお茶でもごちそうしてあげるから。

麻紀 お茶じゃなくて説明をしなさい説明を…！

千堂 だからお茶飲みながら説明してあげるって言ってるのよ。行こう。

麻紀 あ、ちよつと！ 待ちなさいってば。

千堂 早くしなさいよ、置いてくわよ…。

千堂、退場していく。

麻紀 …あんにやろう、タダじゃおかねえ…。

麻紀、ハンドバッグを拾って追いかける。  
退場。

## 一幕・四場

事務所のような部屋。  
けたたましい電話の音。  
白衣を着た作本加代、資料のようなファイルを大量に抱えて登場。

作本 高梨！ 電話出て！

返事はない。

作本 高梨！ 電話だと言うのに！ おい！ こら！…しょうがないな、もう。

資料をそのへんに置いて、戻る。

作本 はい作本ですが！…ああ？ なに？ ああ、紺ちゃんか…。

反対側から高梨章、コンビニの袋を持って登場。

高梨 作さん、大変ですよ大変。(スポーツ紙を振りかざし) ほら、Jリーグがね…  
あら。

作本、電話を引きずって出てくる。

作本 うん。…うん。…あそう。(電話に応答しながら、高梨を見つけて、なにやってんだ、という身振り)

高梨 …(いやあ、ちよつとコンビニに、という身振り)

作本 うん。うん。…うん、わかった。だいたいわかったけど、こみ入った話みたいだから、あなた、ちよつとこつち来れないの。

高梨 …。(恐る恐るヨーグルトなどを取り出し、差し出す)

作本 (いらん！ の身振り)…うん。そうか。わかった。じゃ、予定がはつきりしたらまた電話して。いい？

高梨 …。(これは？ という感じでなにやらチャラけたお菓子を取り出し、差し出す)

作本 (高梨を殴りながら) うん。心配ないよ。なんとかしてあげる。だいじょぶよ。元氣だして。…うん。それじゃあね。(電話切る)

高梨 大変ですよ、Jリーグがですね…

作本 なにをやったんだオマエは。

高梨 いやだからJリーグが…

作本 勝手に外出するんじゃない、まったく。

高梨 はあ。ちよつとその、小腹が空いちゃったもんで…

作本 なにが小腹だ、生意気な。電話番号がフラフラ出歩いてちゃ雇ってる意味がないだろう。

高梨 僕、電話番号なんですか。

作本 それ以外の能力がおまえのどこにある？

高梨 ひどいなあ。

作本 ひどいのはおまえの味覚だ。なんだその訳のわからん菓子は。

高梨 あ、これ、ちよつと食べてみませんか？



作本 断る。

高梨 意外と美味しいんですけどね。

作本 意外と美味しいということは概ね不味いという予想を前提にした価値判断だ。

高梨 まあそうですね。

作本 マイナスを前提にして矮小なプラスを楽しむような貧民根性は持ち合わせがない。

高梨 だって作さん貧乏じゃないですか。

作本 うん。志操の高さのことを言っている。

高梨 シソウ？

作本 志。

高梨 あ、そうそうココロザシと言えば、大変ですよ、大変。Jリーグがですね…

作本 そんなことより頼んだ仕事は出来たのか。

高梨 ああ、はい、これです。

高梨、尻のポケットから紙束を出して渡す。

作本 極秘資料を持ち歩くな、馬鹿者。(高梨の頭を紙束ではたく)

高梨 あいた。…極秘資料で殴らないでくださいよ。だいたいそれ、なんなんですか？

作本 見ればわかるだろ。依頼人Aがここ一ヶ月、歩行中に信号待ちをした時間の統計資料だ。

高梨 それはわかるんですが。…それがなんなんでしょう。

作本 つまり、依頼人がどれくらい赤信号を待ったかというデータよ。

高梨 いや、それはわかるんです。

作本 わかるのか、賢いわね。

高梨 …いや、僕が言ってるのは、それにどういう意味があるのかという…

作本 だから、道を歩いていて、信号があつて、その信号が赤で、青になるまでその場で立ち止まっていたその時間の…

高梨 いやあの、もういいです。わかりました。いや、僕にはわからないであろうということがわかりました。

作本 (初めてほほえむ) 大発見ね。コーヒー飲む？

高梨 僕淹れますよ。

作本 ありがとうございます。

高梨、コーヒーを淹れに奥へ引っ込む。

高梨(声) さっきの電話、仕事の依頼ですか？

作本 うん、まあ、そんなとこ。知り合いの子なんだけど…。ちよっとトラブルみたい。

高梨(声) どんなトラブルなんです？

作本 なんかね、お姉さんがいなくなっちゃったみたい。

高梨(声) はあ。

作本 夏見っていう子なんだけど、お姉さんとふたり暮らしてね。あたしは会ったことないんだけど、いなくなっちゃったんだって。

高梨(声) へえ…。作さんも忙しいですよね、なんだかんだ言っ

作本 それほどでもない。

高梨、コーヒーを持って戻る。

高梨 はい、どうぞ。

作本 ありがとう。

高梨 (自分も飲みつつ) なにが大発見なんですか。

作本 うん。：君のそういうところ、なかなかいい。

高梨 え？ そうですかね。

作本 自分にはわからないということがわかった、って言ったでしょ。

高梨 ええ。

作本 なにが理解可能で、なにが理解不能かを判定することは、人類にとって最も本

質的で難易度の高い命題です。

高梨 つまり知性の限界を知ることですか？

作本 厳密に言うと、知性という限定された認識力の到達範囲の限界。

高梨 限界ってやっぱりあるんですかね。

作本 高梨くんはパソコンやるでしょ。

高梨 ええ。

作本 どんなにモニタの解像度を上げてても、ドットとドットの間にあるものは永遠に

見えない。そこになにかがあつてたまたま見えないというのではなく、ドット

間にはなにもない。ないことにしてしまうのが知性という認識力の限界なの。

高梨 うーん：なんとなくわかります。

作本 そのあたりのこと、興味あるなら、これ読んでごらん。わりと分かりやすく書いてあるから。

作本、そこらにあつたハードカバーの本を渡す。

高梨 へえ。。。「法則空間の原理的有限性について」。。。硬そうなタイトルですねえ。

作本 学会誌に発表した論文の寄せ集めみたい。商売は下手ね。そのタイトルじゃ誰

も買わないでしょう。

高梨 こうしづか：って読むのかな。庚子塚、弘嗣。

作本 知名度はないけど、優秀な人みたいね。

高梨 うわあ、珍しいですね、作さんが誉めるなんて。

作本 それ、どういう意味？

高梨 だって、この世に作本加代を超える天才が存在する可能性は限りなくゼロに近

いって…

作本 あたしがそんなこと言った？

高梨 いや…：そう思っているんじゃないかなあつて…：ええと…

作本 …。

作本、ちょっと遠い目をしてあらぬかたを眺めている。

高梨 お姉さん、いつからいなくなっちゃったんですか？

作本 (即座に答える) 二週間前からだそうよ。

高梨 そりゃ心配ですね。

作本 (ほほえんで) 君のそういうところは誉める価値があるわ。

高梨 光栄です。

作本 さあ、仕事の続きだ。

高梨 はい。

## 一幕・五場

土木機械音が折り重なって聞こえる。  
工事現場の飯場のような場所。

男物の服を羽織った女の子（尚子）がひとり膝を抱えて窓から外を眺めている。

ヘルメットをして、真っ黒に汚れた作業服を着た土木作業員登場。  
作業員、ヤカンから水を直接飲む。

作業員 ふう……。しんど……。

尚子 おじちゃん、見ない顔だね。

作業員 ん？ ああ……（初めて尚子に気づく）君は……？

尚子 （それには答えず）新人なんだ。

作業員 僕？ うん、まあ、そうだね。久しぶりなんだよ。君は誰かな？

尚子 会社でも倒産したの？

作業員 どうしてそう思うのかな？

尚子 それとも交通事故でも起こしたの？

作業員 質問合戦だね。じゃあ順番に片づけよう。僕は倒産した会社の気の毒な元社員じゃないし、交通事故を起こして稼げなくなったタクシートの運転手でもない。ここにいるのは、まあ本業みたいなもんだな。それでもずいぶん久しぶりで、少しくたびれてる。

尚子 へえ。

作業員 いいかな？ じゃあ、君の番だ。君はここでなにをしているの？

尚子 名前は尚子。みんなナオって呼ぶよ。

作業員 面白いね。

尚子 なにが？

作業員 いや、気にしないで。それで、どうしてここにいるの？

尚子 窓から見てたんだ。あそこに高い塔ができるんでしょ？

作業員 ……。

尚子の見ている窓から、作業員も外を見る。

尚子 きつと眺めがいいね。塔のてっぺんに登ったら。

作業員 だろうね。

尚子 みんなが居ていいって言うんだ。あたしも、しばらくここにいってもいいかなって思う。だからここにいます。

作業員 そう。

尚子 でも気が変わったらどっかいつちやうけどね。

作業員 なるほど。……どうしてあそこに塔ができるって思ったの？

尚子 おじちゃんの本業って、なに？

作業員 さあ、どっちから答えよう？

尚子 おじちゃんから。

作業員 いや、今度は君からだ。あそこに塔ができるって、現場の誰かから聞いたの？

尚子、黙って首を横に振る。

作業員 まだ整地もしてないし、木も伐採してないし、あそこになにか建物ができるなんて、見ただけじゃわからないよね？

尚子 そう？

作業員 しかもあそこに立つのが高い塔なんて、どうしてわかるのかな？

尚子 違うの？

作業員 厳密には違う。ここはね、政府が半分だけお金を出して作っている、産業廃棄物の処理場なんだ。つまりゴミを燃やすところってことだけど…

作業員、尚子のそばにきて、一緒に窓の外を見る。

作業員 あそこにはできる予定になっているのはね、汚れた空気を綺麗にする仕組みが何層にも重なった濾過装置なんだ。

尚子 ふうん。

作業員 現場の人間でもそれを知っているのは、設計に関わっている人間だけだし、そういう人間は、あれのことを「塔」とは言わないんだよ。

尚子 …。

尚子、黙って窓の外を見ている。

作業員 でも、…そう、例えば出来上がった建物を、なにも知らない人が実際に目で見たら、確かに塔に見えるかもしれない。

尚子 …。

作業員 もう一度聞いていいかな？ 君はどうしてあそこに塔ができるって、思ったんだろう。

尚子 …。

作業員 …。

尚子 ふうん…。塔じゃないんだ、あれ…。じゃあ、登っちゃいけないんだね…。

作業員 …尚子ちゃん。君には、…なにが見えるの？

尚子 …。(黙って作業員の顔を見る)

作業員 …見えるんだね？ 君…。

尚子は、窓の外をじっと見透かすように見ている。

作業員 …。

尚子 おじちゃんの番だよ。

作業員 ん？

尚子 おじちゃんの、本業って、なに？

作業員 ああ…、僕はね…

外から大声と足音が近づく。

現場監督 (声) 先生！ 庚子塚先生！

現場監督、駆け込んで登場。

現場監督 ああ、やっぱりここか！

作業員（庚子塚） 出ましたね。

現場監督 出た。やっぱり出たわ。あんたの言った通り、西の斜面だ。

庚子塚 そうですか。作業止めました？

現場監督 ああ、止めた。いやあ、参ったよ。あそこが終わらないと、全部足踏みだ。

早いとこ調べてくれや。

庚子塚 ちよつと一息ついてからでいいですか。

現場監督 そんな呑気なこと言っていないで、頼むよ。

庚子塚 ちよつと腰に来ちゃつて。

現場監督 だからあんた、余計なことしないでいいって言つたでしょうに。調査員な

んだから。遺跡調査の学者先生がなにもセメント捏ねなくたって。

庚子塚 いやあ、まあ趣味なんですよ。

現場監督 とにかく早いとこ調査して、どの程度のもんか鑑定してくれないと、商売

上がったんだよ。（尚子に気づいて）…おう、ナオ。ここにいたんか。

尚子 イセキってなに？

現場監督 ああ？ ああ、まあ、なんだ、その昔にもやっぱり俺たちみたいなのカチ

ンがいてだ、掘ったり建てたり似たようなことしてたっていう、証拠みたいなもんだ。

尚子 見えていい？

現場監督 氣イつけろよ。

尚子、飛び出していく。

尚子 （戸口で振り返って）またね、ガクシャセンセイ！

尚子、退場。

現場監督、ヤカンの水を飲む。

現場監督 やれやれ…。

庚子塚 あの子…

現場監督 あん？

庚子塚 尚子ちゃんていうんですか。どこの子なんです？

現場監督 ああ、ナオか。うん…まあ、な。

庚子塚 なんです。

現場監督 いや、まあ。

庚子塚 わけありませんか？

現場監督 いや、そういうわけでもないんだが…。うん、あの子はまあ、言ってみりや、

現場のお守りまもみたいなんなんだよ。

庚子塚 お守り？

現場監督 うん。

庚子塚 どういうことです。

現場監督 まあ…先生はよく知ってるだろうけど、こういう現場じゃ、普通の人が思ってる以上に、事故っちゅうのはあるもんですわ。

庚子塚 はい。

現場監督 事故のない現場が一番いい、建前じゃそうは言っても、実際はね…

庚子塚 安くて早い現場がいい。

現場監督 そう。施主や発注元が一番喜ぶのはそう。結局は金銭の問題ですわ。人件費削る、工期を切りつめる、どうしたって安全性が後回しになってく。

庚子塚 ええ。

現場監督 でもね、現場の人間にとつちや自分の命に関わる問題だ。事故なんてないほうがいいに決まってるし、そのためにや縁起も担ぐ…。

庚子塚 あの子、縁起ものなんですか？

現場監督 ……学者先生には馬鹿みたいな話に聞こえるだろうがね、ナオは…、あの子は、事故が起こるとき、前もってそれがわかるんですわ…。

庚子塚 ほう。どんなふうにわかるんです？

現場監督 それがよくわからんのですが…、とにかく作業してるとこへ突然ふいっと寄ってきてね、「ここにいないほうがいいよ」っていうんです。半信半疑でその場を離れると、その場所で事故が起きる…。

庚子塚 なるほど。

現場監督 信じられんでしょうが。

庚子塚 ……（無言で微笑む）

現場監督 （照れ笑い）実際、私自身が助けられたんですわ、あの子に。

庚子塚 ほう。

現場監督 それ以来手放せなくなっちゃった。まあ、あの子もこんな暮らしを気に入ってたみたいだね。

庚子塚 身寄りはないんですか。

現場監督 それもよくはわからんです。もともとホームレスみたいなことしてたみたいですしわ。ある日現場にふらっと現れて…なんだかおかしなのが来たと思ったら…

庚子塚 ……事故を予言した。

現場監督 （頷いて）現場に居着くようになってもう一年以上になるけど、その間にあっちこっちの現場で同じようなことが、あんだ、そう…十件以上はあった。うちの若いもんたちの間じゃ、もうすっかり人気者ですわ。

庚子塚 マスコットガール…いや、守護天使ってとこですわ。

突然、外で騒がしい声。

若い作業員が飛び込んでくる。

現場監督 なんだ、どうした。

若い作業員 かつかつか監督ッ！ 大変だ、ナオが倒れた！

現場監督 ……なんだとッ。

若い作業員 西の…西の斜面で…あいつ、ぼうっと眺めてたかと思ったら、突然…

現場監督 来い！

現場監督、作業員を連れて退場。

庚子塚、後を追おうとし、ふと窓の外を見る。

庚子塚  
∴。

思いを振り切るように、足早に退場。

## 一幕・六場

とあるマンションの入り口。  
 瀬瀬が立っている。  
 真田満智子、登場。

瀬瀬 警部、こつちです。

真田 (近寄ってきて) 警部って言うな。

瀬瀬 あ、すいません。警部補。

真田 そうじゃなくて。そういう身分がバレるようなキーワードを言うなっていうの。

瀬瀬 そうでした。

真田 あくまで、身分隠して調べてるんだからね。それ忘れないように。あれか、被害者のマンションは。

瀬瀬 そうです、203号室。

真田 よし、まず身辺の聞き込みからだ。どんな人物だったか、どんな生活をしてたか…。あれ作ってきた？

瀬瀬 はい。

瀬瀬、名刺らしきもの取り出しを渡す。

真田 なんだこりゃ。

瀬瀬 可愛いでしょ。うちの近くのゲームセンターで作ってきたんですけど。

真田 …可愛くしてどうするんだ。

瀬瀬 ダメですかね。

真田 …。(絶句している)

瀬瀬 …でも、これってひょっとして、身分詐称じゃないんですかね。

真田 だからどうした。

瀬瀬 マズくないですか。

真田 だからバレないようにとっている。

瀬瀬 はあ…。

真田 頼りない顔しない。鈴木はサミットの警護に借り出されて動けないし、おまえしかいないんだから。頼りにしてるよ瀬瀬くん。

瀬瀬 …光栄です。

真田 セリフと表情が合っていないよ瀬瀬くん。

瀬瀬 …。

真田が瀬瀬をつつく。

瀬瀬、真田が示す方を見る。

その方向から、今風なファッションの若い女がひとり、登場。

真田 ほれ来た。行け。

瀬瀬 はい。

瀬瀬、若い女の後ろから近づく。

真田は物陰で見ている(退場)。



纈纈 あのうち、すいません。  
若い女 …。

纈纈 あ、突然すいません。今、このマンションから出ていらっしやいましたよね？  
若い女 なによ、あんた。

纈纈 すいません、お手間取らせませんので、ちよおつとご協力を。

若い女 …。

纈纈 実はワタクシこういうものなんです。

若い女に名刺を渡す。

若い女 興信所？

纈纈 はい。ちよつとした信用調査なんですよ。ご協力願えませんか。

若い女 なにそれ、なんのこと。

纈纈 このマンションのですね、203号室に住んでらっしゃる方についてなんです。  
すが…。

若い女 …。

纈纈 ご存じですか？

若い女 …。

纈纈 あの…

若い女 知らない。

纈纈 あ、そうですか。どんな方かもご存じない？

若い女 …あたし、ここに住んでるわけじゃないから。

纈纈 あれえ、でも、さっき郵便受け覗いてらっしゃいましたよね？

若い女 …。

纈纈 …あの。

若い女 そんなのあたしの勝手ですよ。

纈纈 そりゃそうですけど…あの…他人の郵便物覗いたりするのは、軽犯罪ストレス  
ですよ。

若い女 あんた警察？

纈纈 (一瞬絶句)と・ん・でも・ない。あの、私こういうものでして…(また名刺  
を渡そうとする)

若い女 もう持つてるよ。この名刺、なんか安っぽいけど、本物？

纈纈 え？ ええ、も、もちろんですよ…。

若い女 とにかくあたし何も知らない。ここに友達が住んでるから遊びに来ただけ。

関係ないから。それじゃね。

纈纈 あ、あのっ…ちよつと待ってくださいませ。

若い女 なんなのよ、あんた。

纈纈 いや、もうちよつとお話を…

若い女 関係ないっていつてるでしょ。

纈纈 関係ないっていうことは、いちおう知ってはいるってことですよね。

若い女 …。

纈纈 でしょ？

若い女 知らない。

纈纈 その間がどうも気になるんですが。

若い女 (即座に) 全然知らない。見たことも聞いたこともない。触ったことにおいを嗅いだこともない。他人。第三者。見知らぬ男。これでいいの？

纈纈 男の人だっというのを知ってるわけですね？

若い女 ……あんた、言葉の綾っていう言葉知ってる？

纈纈 なんていうお名前のかたですか？

若い女 だから知らないっていつてるじゃない！

纈纈 いや、お友達のかたですけど。

若い女 え？

纈纈 ここに友達が住んでるって、さっき。

若い女 ……

纈纈 それも言葉の綾ですか？

若い女 なんてあんたにそんなこと言わなきゃならないわけ。

纈纈 いやあ…それは…

若い女 あたしがどこでなにしようが、あんたに報告する義務なんかないんじゃない？

纈纈 ごもつとも。

若い女 じゃあね。

纈纈 あ、ちよつと…

若い女 しつこくすると警察呼ぶよ。

纈纈 ……

若い女、さっさと退場。

纈纈、真田の方を窺うと、真田は「バカが、なにやってんだ」という顔で呼び寄せ

る。

纈纈、真田の方へと退場。

若い女、早足で登場。

立ち止まって携帯電話を取り出し、ダイヤルする。

若い女 ……もしもし？…あの…作本さんのお宅でしょうか？ あの…加代さんは…。

私、夏見と申します。…はい、お願いします…。

若い女(夏見紺子)、気を落ち着かせようとするように息をつく。

紺子 もしもし、加代さん？…わたしです、紺子です。…あの…今から伺ってもいいでしょうか。…すみません。今…姉のマンションの近くです…。ええ…大丈夫です…とにかく、そちらに行つて話しますから…。はい、すぐ行きます。ええ…。加代さん、わたし、なんだか…嫌な予感がするんです…とても…。凄く悪いことが起きるような…。ええ、ごめんなさい、それじゃ…。

携帯電話を切った紺子は、すぐに動こうとはせずその場に立ちすくむ。

紺子の電話の間、舞台上別の場所に、庚子塚、現場監督、尚子が登場している。

現場監督 ナオ…気がついたか。

尚子 …。

現場監督 ダイジョブか？ ええ？

尚子 …うん。

現場監督 いやあ…ビックリしたぞ、おい。

尚子 …。

庚子塚 尚子ちゃん。

尚子、ぼんやりと庚子塚の顔を見る。

庚子塚 西の斜面から谷の方を見ていて倒れたって聞いたけど…

尚子 …。

庚子塚 なにか見えたのかな？

現場監督 なにかって、あんた、西側の谷って言ったら…

庚子塚 なにか見えたんだね？

尚子、かすかに頷く。

現場監督 だってあんなところ、なんも手エつけないところでしょうが。

庚子塚 なにか見えたの？

尚子 …。

庚子塚 尚子ちゃん。

尚子 …丸太で作った建物…が、あつて…

現場監督 丸太ア？

庚子塚 櫓みたいなの？

尚子 そのまわりに…たくさんのヒト…谷いっぱい…見渡す限り…数え切れないほど…

ヒト…ヒト…

顔を見合わせる庚子塚と監督。

現場監督 人？

尚子 みんな、丸太で作った建物を見てた、谷の真ん中にある…みんな黙って…見てた…

庚子塚 怖かったの？

尚子 …。(小さく頷く)

庚子塚 なにがそんなに怖かったのかな？ あんまり大勢人がいたから？

尚子 (首を横に振る)……みんな…青い服を…着てた…。青い色の布を体にまいていた…。

庚子塚 青い布…？

尚子 …谷が海の底になったみたいだった…。ううん、海の底よりも…青空よりももっと…怖いくらいに青い…青い、布……。

暗転。